ウトレヒト陸軍軍医学校の我国への影響

○石田純郎[*1]　ハルム・ボイケルス[*2]

幕末維新期の蘭学系の医学校、特にオランダ人医師たちが直接指導した長崎、熊本、岡山、大阪、京都（府立）、金沢、新潟、東京の医学校の教科内容については、従来断片的に知られているだけである。その起源などについては、不明の点が多い。

ボードインの教え子であるウトレヒト陸軍軍医学校出身のオランダ医たちが、当時の日本へ大挙して訪れ、これらの医学校で教授したということを、演者はすでに指摘した。自分の母校で習った内容を基礎として、彼等が日本で講義を行ったということは、容易に想像できる。なおすでに、演者は、これらの医学校で行なわれた解剖学講義の多くは、実はウトレヒト陸軍軍医学校のテキスト、フレスの解剖書に基づいていたことを指摘した。

オランダで一八四二年に医師の実態調査が実施されたが、その結果実に二五種もの異なった医師免許を持つ医師が存在したという。その免許の差は、主として二つの要素、出身学校の種類と、専門とする科の質の差から由来していた。当時オランダには、医学校は四種類存在し、質の高い方から、大学、アセニウム、軍医学校、クリニカルスクールの順であった。

ウトレヒト陸軍軍医学校は、一八二二年から六五年迄の間、設置された、当時オランダ唯一の軍医学校である。一六才から二〇才迄の男子を入学させ、修学年限は通常四年間であった。

この学校のカリキュラムであるが、自然科学としては、植物学（一単位）が一年で、植物学実習（〇・二五単位）が二年後期で教えられ、化学（二単位）は一・三年で教えられ、重視された。物理学（一単位）は一年で教えられた。（一週一時間で一年間続くものを一単位とした。）

基礎医学としては、解剖学（五単位）が一・二・三・四年で教えられ極めて重視された。解剖実習（一単位）は二・三年の後期で、顕微鏡（〇・五単位）は二年前期で教えられ

た。生理学（二単位）も重視され、二・三年で教えられた。病理学治療学総論（〇・五単位）は二年後期で教えられ、病理解剖（〇・五単位）は四年前期で教えられた。薬物学処方学（〇・五単位）は二年前期で、薬物実習（一単位）は二年後期と三年前期で教えられた。

社会医学としては、衛生実習（〇・五単位）が二年前期で、中毒学（〇・二五単位）は四年前期で教えられた。

臨床医学としては、内科学（〇・五単位）は四年前期で、内科実習（含病歴記録法）（一単位）は四年で、系統診断法（〇・二五単位）は四年後期で教えられたが、内科系は重視されていなかった。外科学（一単位）は三年で、外科実習（一単位）は四年で、止血法（〇・二五単位）は四年で、包帯実習及び外科器具使用法（一単位）は一年で教えられた。他の臨床科目は教えられていないが、当時産科学と眼科学は、外科学の一分野であった。

軍医学としては、死体取扱実習（〇・二五単位）が四年前期で、陸海軍法規（〇・二五単位）が四年後期で教えられた。また歩兵訓練体育（三単位）が一・二・三年で、乗馬訓練（〇・二五単位）が四年前期で行なわれた。

一八四〇年代から六〇年代にかけ、軍医学校用のテキストが一八冊出版され使用された。

さて陸軍軍医学校のカリキュラムと、大学及びクリニカルスクールのカリキュラムと比較する。大学で教えられなくて、軍医学校で教えられた主要科目には、解剖実習、内科実習、系統診断法、外科実習、包帯実習、死体取扱実習等がある。次にクリニカルスクールで教えられなくて、軍医学校で教えられた科目には、植物学、化学、物理学、顕微鏡等がある。大学、クリニカルスクールとのカリキュラムの比較により、陸軍軍医学校は、理論と実地能力のバランスのとれた医師の養成を目的としていたことが、明らかになろう。

さて長崎の医学校におけるポンペのカリキュラムであるが、一八五七年から六二年の五年間に以下の科目が教えられた。

自然科学としては化学と物理学、基礎医学としては解剖学、解剖実習、組織学、生理学、病理学総論及び内科学、薬物学、薬学実習、中毒学、臨床医学では内科学、ポリクリニック、外科学、外科手術学、包帯実習、眼科学、産科

学、それ以外では法医学、医事法制、一般医学、採鉱学を教えた。

カリキュラムの構成自体が、ポンペの母校であるウトレヒト陸軍軍医学校のそれと酷似している。しかしながらポンペは、論文の準備に軍医学校のテキストを使いながらも、その要旨だけを講義したにすぎない。

ポンペ以外にも現在迄に、ボードイン（長崎・大阪）（生理学）、スロイス（金沢）（解剖学・中毒学）、ロイトル（岡山）（解剖学・外科学）等の講義も、ウトレヒト陸軍軍医学校の講義にならっていたことが判明した。

＊1　三菱水島病院

＊2　ライデン大学医史学

吉田松陰と医学

田中助一

長州藩の山鹿流兵学師範であった吉田松陰（一八三〇―一八五九）は、数え年二二歳の嘉永四年（一八五一）三月、兵学研究のため江戸に赴くこととなり、三月五日公駕に先立って萩を出発した。四月九日江戸桜田の上屋敷に到着、五月二四日朝初めて山鹿素水及び佐久間象山を訪問し、翌二五日「蠻語箋」を買った。そして日記の五月二八日の項には、「今日より少しく蠻語を学ぶ」と記している。これにより松陰が蘭学を学ぶ意志であったことがわかる。

松陰は同年一二月一五日に、友人の南部藩浪士江幡（ばた）五郎（別名安芸五蔵、後の那珂通高）の仇討を助けるため、藩の許可を待たないで東北遊歴の旅に出たので、藩ではその扶持を召し上げた。しかし松陰は藩主の深い理解と温情により、一〇か年の国内遊学がゆるされた。

嘉永六年六月三日米国使節ペリーが浦賀に来航し、幕府